

「地域や人とのつながり」という視点で、大切にされていることやエピソードはありますか。

いつも「話しかけること」を大切にしています。島民のみなさんにはできる限り声をかけますし、離島のため船を利用することが多いので、そこでお会いする方にも積極的に話しかけています。

馬島のファンを増やすこと、島を訪れてもらうきっかけをつくること、人とのつながりを広げていくこと、こうした思いがイベントを計画する時の根っこにあります。

キャンプと言えばバーベキューが思い浮かびますが、ある時、キャンプをしていた若者のグループが、ハンバーグなど手の込んだものを作っていました。興味を持って話しかけると、大学の子どももキャンプサークルだということが分かり、これがきっかけで毎回サポートをしていただけるつながりができました。

島には若い人がいないので、子どもたちのサポートを頼める人材を探すことは困難です。この時の出会いがなければ、「子どもキャンプ」は実現していなかったかもしれませ

ん。この出会いには感謝しています。

島の住民のみなさんからは、「子どもの声が聞こえるようになって嬉しい」との声をいただいています。

今後、どのように活動を展開されたいですか。

まずは、無理せずイベントを継続していくことが目標です。そして、違うバリエーションの企画を立て、いろいろな層にもアプローチしていきたいです。幼児と親を対象とした「おさんぽ会」、若い世代を対象とした「大人キャンプ」など、島の豊かな自然を楽しんでもらえる企画を考えています。

私たちが初めて島に来た時に感じた自然の豊かさ、そして一瞬で好きになったこの島を、もっとももっとくさんの方に知っていただきたいと思っています。

(取材：大久保、河村)

## 知り直す・ 出会い直す



studio-L

むら おか し おり  
村岡 詩織 さん

地域の人が必要だと思う未来を、地域の人の力でつくるお手伝いをしています。

活動のきっかけや内容について教えてください。

2015年3月、島根県益田市にUターンしました。同時期に、Uターン前から在籍しているコミュニケーションデザイン事務所studio-Lが阿武町の地域づくりのお手伝いをするご縁をいただき、同年4月から現在に至るまで関わっています。

1年目は、直接町民から言葉の強弱、顔の表情など気持ちの入った生の声を聞きたくて、ワークショップを開催し、課題や要望などを計画書

に反映し取りまとめを行いました。「阿武町版総合戦略」の副読本として「21世紀の暮らし方研究所」という冊子を発行したところ、そこに描かれている町の未来に共感が集まり、実際にそのプロジェクトにチャレンジしたいと有志が集まり「21世紀の暮らし方研究所」(通称:ラボ)が誕生しました。

2年目は、ラボのメンバーと一緒に、プロジェクトの企画、運営を行いました。ラボでの活動テーマは「すまい」「しごと」「ひと」と大きく3つに分け、さらに細分して8つのプロジェクトとし、月ごとにテーマ